

官民協働で取り組む「千代田区“飼い主のいない猫”との共生」

Cooperative Program between Chiyoda Ward and Local Volunteers for the Coexistence of People and Stray Cats



ライター・ジャーナリスト/ちよだニャンとなる会・香取 章子

Akiko KATORI, Writer and Journalist, Chiyoda Nyantonaru-kai Volunteer Group, Tokyo.

○香取 章子 こんにちは。香取章子と申します。きょうはお招きいただきありがとうございます。ずっと一緒に居ようねというテーマですが、皆さんそれぞれですが、共通しているのは今動物が家族の一員であり、社会の一員であるという認識がいよいよこれを普遍的な価値として広がっていているなと思います。



【スライド1】



【スライド2】

それできょうお話しする事例は千代田区の話なんです。家族の一員、社会の一員といわれながら負の部分ということで、今なお年間23万頭の犬猫が全国の自治体で殺処分になっています。そしてそのうちの多く、7割が猫で、そしてその8割が子猫なんです。なぜ子猫が殺処分にならなければならないのか。それこそ死ぬために産まれてきたような命がなぜそんなにいるの

かと、そういう問題点できょうは私が生まれ育ち、現在も住んでいる千代田区の事例ということで話したいと思います。つまり、きょうお話しするのは千代田区だからできたのだ、都心だから、財政がいいから、そういう問題ではなくて、不妊去勢手術が殺処分の減少の大きなかぎになるということを実証したという意味でお聞きいただきたいと思います。

それで、一応、千代田区の事例ということで全体を紹介しますが、千代田区というのは東京都のほぼ真ん中に位置し、国会議事堂のある永田町、官公庁が集まる霞ヶ関、東京駅と丸の内ビジネス街、それから秋葉の呼び名で知られる秋葉原、本の町神田神保町、オフィスビルとマンションが混在する麴町番町など、それぞれ全く環境の異なる地域が皇居を取り囲む、ドーナツ型の地区です。区民は4万5,000人ですが、昼間人口というんですが、1日85万人の人が通勤・通学などで訪れます。昼は過密都市、夜は過疎地になるわけです。

今ちょうど写真が出てるのが、千代田区1番町英国大使館内の地域猫、これは耳先に手術済みの印があるんですが、写真はちょっととりあえず説明せず雰囲気写真だけにしています。千代田区でどのような取り組みが行われているかと言いますと、飼い主のいない猫の去勢不妊手術費助成事業が実施されています。行政と住民、在勤者を中心とするボランティアが協働で飼い主のいない猫に去勢不妊手術を行って、頭数が増えないようにしつつ、一代限りの命を地域見守っていくというもので、いわゆる地域猫、またはTNR、Trap、Neuter、Return、一時保護、不妊去勢手術、もとの場所に戻す、このTNRです。平成12年に始まってから、ことしで12年目になります。

【スライド2】

そして、よく聞かれる質問なんです、なぜこんな事業が突然できるようになったのかというようなことなんです、これはどこの地域とも全く事情は同じだったんです。千代田区でもかつては飼い主のいない猫に

なぜこの事業が実施されるようになったのか



- 千代田区でも、かつては猫についての苦情が保健所などに数多く寄せられていた。「排泄物が臭い、汚い」「ゴミを散らかされた」「鳴き声がうるさい」「生まれたばかりの子猫がいる」「車にひかれた猫がいる」「病気やけがの猫がいて、かわいそう」など。
- とくに問題となっていたのが、いわゆる「えさやり」をめぐるトラブル。人間関係が険悪になりかけていた地域もあった。
- 猫嫌いの人からも、猫好きの人からも、「何とかして」という声が上がっていた。

【スライド3】

ついでに苦情が保健所などに数多く寄せられていました。排せつ物が臭い、汚い、ごみを散らかされた、泣き声がうるさい、そういった迷惑をこうむっているという人もいました。産まれたばかりの子猫がいる、車にひかれた猫がいる、病気やけがの猫がいてかわいそうといった心を痛めている人たちもいました。そして中でも大きな問題となっていたのが、猫に食べ物を与える人とそれを迷惑に思う人との間で発生するトラブル、いわゆるえさやりをめぐるトラブルでした。これが原因で人間関係が険悪になりかけていた地域もありました。猫嫌いの人からも猫好きの人からも何とかしてという声が上がっていたんです。【スライド3】

「飼い主のいない猫」との共生をめざして



- 千代田区議会全会一致で「飼い主のいない猫の去勢・不妊手術費助成事業」が始まった。
- 当初は2000年から02年までの3年間の時限事業として、年間190万円の予算が組まれた。
- 動物愛護の推進と地域環境の向上をめざして始められたのだった。

千代田区紀尾井町・ホテルニューオータニ敷地内の猫。行政と事業者が連携・協力して、去勢・不妊手術を実施。(2010年10月撮影)

【スライド4】

そして、区は苦情やトラブルへの対応にそのころ苦慮していたわけですが、一方、飼い主のいない猫に自己負担で去勢不妊手術を行い、食べ物を与えるだけでなく、食べ残しを片づけ、排せつ物の始末もしていた、そういった清掃に努めている人たちも少なくありませんでした。こうしたボランティア活動のことが千代田区議会で取り上げられ、議会全会一致で飼い主のいない猫の去勢不妊手術費助成事業が始まったのです。当初は平成14年までの3年間の時限事業として、年間190万円の予算が組まれました。ちょうど平成12年と言えば、動物の愛護及び管理に関する法律いわゆる動

物愛護法が施行された年です。千代田区飼い主のいない猫の去勢不妊手術費助成事業は動物愛護の推進と地域環境の向上を目指して、決して動物愛護だけではなく両方の側面から、地域社会全会一致ということで始められました。【スライド4】

「普及員（ボランティア）制度」がつけられる

- 飼い主のいない猫に去勢・不妊手術を行うには、それぞれの地域で飼い主のいない猫を見分け、一時保護して、動物病院へ連れていき、手術後に迎えにいく、元の場所に戻す、といった作業が必要。
- 区は、事業を始めるにあたって、「普及員制度（ボランティア制度）」をつくった。飼い主のいない猫に自己負担で去勢・不妊手術を行っていた区民に事業への協力を求めるほか、区民を対象にボランティアを募集。




千代田保健所の会議室に保健所職員、ボランティアが集まり総会。(2010年11月撮影)

【スライド5】

そして、飼い主のいない猫に去勢不妊手術を行うには、それぞれの地域で飼い主のいない猫を見分け、一時保護して動物病院へ連れていき、手術後に迎えにいく、元の場所に戻すといった作業が必要です。そうしたことを保健所の職員だけにするのは現実として難しい。そこで区は事業を始めるに当たって、普及委員制度、いわばボランティア制度をつくりました。以前から飼い主のいない猫に自己負担で去勢不妊手術を行っていた区民に事業への協力を求めるほか、区の広報誌を通じて区民を対象にボランティアを募集したんです。保健所の呼びかけで、飼い主のいない猫の去勢不妊手術費助成事業に関する連絡会が会議室で開かれました。

【スライド5】

「ちよだニャンとなる会」発足

- 保健所の講堂で「飼い主のいない猫の去勢・不妊手術費助成事業に関する連絡会」が開かれ、区民ボランティアが集まった。
- ボランティアたちは横のつながりを強めていき、01年「ちよだニャンとなる会」発足。同会は、区民と在勤者を中心とするボランティア・グループ。




千代田区役所本庁舎1階のホールで毎年開かれる「福祉まつり」にブースを出店。パズーと募金、会報の配布などの普及・啓発活動を行う。(2011年10月撮影)

【スライド6】

初めての会合に集まった区民ボランティアは30名ほど、この普及委員制度をきっかけに、ボランティアたちは横のつながりを強めていき、2001年にちよだニャンとなる会が発足しました。つまり、この会は区の事業が始まる以前から存在していた動物愛護団体などで

はなく、保健所の呼びかけによって集まった住民と在勤者を中心とするボランティアグループということでした。ちなみに、私の立場は区の広報誌に猫ちゃんのボランティア募集というイラストつきで出ていて、うちの母親が、外の猫ちゃんを病院に連れていったお金は区が返してくれるらしいわ、うちも応募しましょうと言ってうちの母親に言われて、今までだけがしてた猫を病院でというのを、そうか区がお金、病院代を払ってくれるらしいというので、登録をしたらペット問題の本まで出している、だったら小冊子やパンフレットをつくる編集や執筆でぜひ御協力くださいと保健所にリクルートされたのが私の立場です。ですから、ちよだニャンとなる会という名前も、後でそういう会をつくるんですかという感じで、全く私は首謀者ではない。この事業に対してアイデアも言ってないし、それからこのちよだニャンとなる会も集まっていったら、もう既に主婦の人たちが中心になってやっていて、そういう名前、ニャンとなる会、何だかすごい名前だなと思っただけで、そして名簿が配られていたら私のところに広報担当と書いてあって、何の許可もなく、何の打診もなく、神田村といいますが、千代田村ですので、割と人口も少ないところなので割合いいかということでした。だんだん決まってくると、そんな感じで始まりました。

【スライド6】

区内外の動物病院が事業に協力

- 区は、事業を始めるにあたって、区内外の動物病院に協力を依頼。初年度で12施設が協力動物病院として委嘱を受けた。
- 行政が中心となり、区民ボランティア・獣医師の3者が連携・協力するシステムが出来上がったのだった。



千代田区有楽町・マリオンヘイトシアの公開空地で保護、隣接する新宿区の動物病院に運ばれた。去勢手術後、譲渡（2011年11月）



【スライド7】

そして、飼い主のいない猫の去勢不妊手術費助成事業というのは、行政とボランティアだけでは進められるものではありません。手術を引き受けてくれる動物病院の存在があってこそ実施が可能になります。ちなみに、千代田区の立場というのは、区では猫や犬を扱っていません。東京都動物愛護相談センターに、もし動物の引き取りを求める人がいたら連絡をして東京都が取り扱います。ですので、施設もないし獣医師の職員もいません。獣医師資格を持っている人が食品関係にいますけれど、動物絡みの獣医師の職員もいません。

ですので、またもう一つ言いますと、千代田区は過疎地であるということで、動物病院が当時1軒しかありませんでした。

その1軒というのはかなり御高齢の先生がいらっしゃるって、その1軒ということだったので、ある意味では獣医師会に全体をお願いではなくて、この手術を引き受けてくれる動物病院というのをどのように決めたいかと、区内の動物病院、つまりたった1軒の先生ははいということ、今90歳ぐらいなんですけど、それと同時にボランティアや区民、在勤者からあの先生に頼みたいな、きっとやってくれるよとか、いつもお願いしていますといった個々の人たちの推薦があって、近隣の区域にある動物病院に事業への協力を要請しました。

最初の年度で協力動物病院として委嘱を受けたのは、初年度で12施設です。そちらの赤坂動物病院の先生も初年度からの協力動物病院として、現在では保護譲渡のほうでどんどんやっていただいているんですが、後でその話も出てきますが、初年度からの先生は道を1本隔ててこっち側は千代田区永田町、こっち側は港区赤坂なんですが、先生はもともと千代田区民だった時代もあるということで、赤坂動物病院さんは非常にありがたくもう本当に頼っております。こうして千代田区では、当時平成12年、2000年に行政が中心となって区民在勤者を中心とするボランティア、それから動物病院、獣医師の三者が連携協力するシステムができて上がったのです。

【スライド7】

千代田区「飼い主のいない猫の去勢・不妊手術費助成事業」の実際

- 千代田区「飼い主のいない猫の去勢・不妊手術費助成事業」助成金の限度額は、雄が1万7000円、雌が2万5000円
- 平成23年度（2011年）の年間予算額は250万円
- 現在では、保健所と連携して手術を実施すれば、区民や在勤者でなくても助成を受けられる。



上智大学法科大学院キャンパスでTNRと子猫の譲渡を実施。ボランティアがトラップを置く（2011年7月撮影）



【スライド8】

そして、この飼い主のいない猫の去勢不妊手術費助成事業は実際どんなふうに行われているのかということなんですが、より具体的な情報ですけれど、助成金は限度額が決められています。上限金額は雄が1万7,000円、雌が2万5,000円、これは2011年、平成23年度の年間予算額は250万円です。ちょっとおととしぐらいは300万円だったんですが、大分猫の数が減りまし

て、手術をする対象の動物が減ったというのがあります。今、年間 250 万円です。当初助成の対象は区民の申請に限られていましたが、現在では保健所の承認を受けて手術を実施すれば、区民や在勤者でなくても助成を受けられます。訪問者でありますとか、よく有楽町に映画を見に来る新聞記者とか、そういう方もいらっしゃいました。いろいろな人がいます。いつもお使いで来ていますとか、それからたまたま関心があったとか、千代田区は進んでいる場所なので勉強に来ましたとか、いろいろな人がいます。いずれにしても保健所と連携協力していただければ、勝手にやらなければ、だれでも助成を受けられます。

それから、飼い主のいない猫の去勢不妊手術の実施の流れなんですけれど、それぞれの地域で人や猫によってケース・バイ・ケースなんです。これは一概に何とも言えません。今、東京都では 23 区中 21 区が不妊去勢の助成制度がありますけれど、それぞれの地域でも大きく違ってまして、例えば住宅街が中心の区なんかですと 3 点セットといって不妊去勢手術、えさやり、片づけという 3 点セットだそうなんです。千代田区はそれは無理なんです。ですから、基本的にボランティアの人は食べ物を与えたり、掃除をしたりというのはやってません。その地域の人が既に食べ物を与えているからです。ほとんど、そこの地域の人にお任せしている。ただ、不妊去勢手術を 90 のおばあちゃんに捕獲器を使ってやってくれというのが難しいと、それから保健所の人もやるんですけれど、そういったことで 3 点セットとは限ってません。あくまでボランティアの人はサポートとアドバイス、不妊去勢手術ということなんです。【スライド 8】



【スライド 9】

おおむね大体どういう流れになりますかという、基本的に不妊去勢手術をするという中心人物として名乗りを上げた人は、保健所に飼い主のいない猫の去勢不妊手術費助成承認申請というのをを行います。でも電話

で、どこどこ町でやりますよで実は済んでいて、本当に書類が交わされているわけではないんです。というのは、もし万が一もう助成金を使い切っている場合にまずいなということで、一応一言ちゃんと保健所に言って、それから勝手にトラップが置かれていた、何だこれはということになるといけませんので、保健所にはちゃんと伝えるという意味です。【スライド 9】



【スライド 10】

その次に、保健所から飼い主のいない猫の去勢不妊手術費助成決定通知、つまり、ひとつよろしくお願ひします、トラップなければお届けしますと保健所が言うわけです。そしたらトラップを使って飼い主のいない猫を一時保護します。トラップは保健所、またはちよだニャンとなる会が貸し出しています。このごろでは、ちょっと貸し出しというよりも保健所そのものが実は不妊去勢手術、TNRは主には保健所のスタッフがやっています。ボランティアの人は別の役割が多いので、保健所がみずから飼い主のいない猫と地域のほうから相談があった場合に中心になってやっています。

大体、ちなみに千代田区の住民は、免許を持っていない人がとても多いんです、車を持っていない、免許を持っていない。そしてボランティアの人たちもほとんどタクシー利用なので、最も今、都心でタクシーに乗ると、それ不妊去勢手術をするんですよとか言って、タクシーの運転手さんはみんな知ってます、大体。いつも乗せてますよとか、23 区のうち 21 区がやりますから。それとほかの 2 区でも自主的に自己負担でやりますので、これは首都圏は不妊去勢手術をして戻すというのは非常によくやられています。

ですので、10 年前は捕獲器を置いただけで猫を殺すんじゃないかと取り囲まれて胸ぐらをつかもうとするような男性、今でもつい 3 年ぐらい前に秋葉原でトラップを保健所の職員とボランティアと協力者と、それは台東保健所の人と千代田保健所の人と両方いたんですが、置いていたら取り囲まれちゃって、違うんですと

言って、ちゃんと張り紙も張ってあるんだけど、猫を捕まえてどうするんだ、殺すんじゃないだろうかなとなるわけです。どちらかというと、今、都心は動物愛護の人、動物福祉といえますか、動物好きの人の意見のほうが圧倒的に強いんです。連れていって殺してくれるなんて言った日には、もう町内でもぼこぼこにされます。冗談にもならないというか、前は冗談で、みんな皆殺しにしちゃえよなんて言ってて笑ってた人が、だれも笑ってくれなくなったと、そういうのが今の時代です。だから、たまたま東京以外に行くと、今回はちょっと驚いたことがいっぱいありました。ちょっとそれになれ過ぎてしまったなど。【スライド 10】



【スライド 11】

そして次のステップですが、Neuter、要するに保護した猫を動物病院に運んで手術をします。保護した猫を動物病院に運びます。現在では区内外どこの動物病院、つまり、最初の年の12施設ではなくて、どこの動物病院で手術を実施しても助成を受けられます。その先生がお外の猫ちゃんですけど、よろしくと。千代田区の書類を持ってきたのでここに判ことサインをくださいと言って、いただいて、金額を書き込みということで、その上限、よく先生によっては上限の範囲で本当に快くやっていたら先生が大変多いです。

麻酔が切れないうちに耳の先を小さくV字型などにカットして、手術済みの印をつけます。これは手術済みの猫を再度捕まえないようにするためです。かつて、ピアスにしていたこともあったんですが、ピアスはとてもよく取れるということ、化膿してしまうと。私も経験があるんですが、これは大変だ、見たことのない猫だ、これは太っているから新宿区のある病院に運んだら、これは臨月だ、きょうにでも手術をしましょうと言って毛刈りをしたら、うちの手術痕がありましたと。要するに個体識別がいかにか難しいか。今はパソコンにすぐにデータを保存できるので、個体識別が非常

にやりやすくなったということ、外に猫がほとんどいなくなってきたというので、千代田区の場合は非常に個体識別は完全にできているんです。

どどこ町のだれだれが面倒を見ていて、またいつの間にか不妊去勢しないままやっているのよとか、そのぐらいなんです。どこの何者かがどうしているかほとんどわかるまでなりました。そして、手術後回復を待って、これは動物病院の方針に従い、猫を動物病院に迎えに行きます。このとき手術費用を立てかえて支払い、これは名乗りを上げたボランティア、一応、私がやりますよと言った人、それなので保健所の職員がほとんど不妊去勢をしているんですが、保健所の職員にかわって地域のボランティアが、例えば神保町だったら出版社の社長さんが、じゃあ私一応立てかえますよとやって、済みません、ありがとうございます、職員の皆さん、御飯でも食べてきなさいというような、いやいやそれはまずいですとか、そういう流れで、一応お金を立てかえるのは名乗りを上げた人なんです。それは基本的に、大体は区民、在勤者の人が立てかえています。

そして、支払ったら手術完了証明書にサインをしてもって、印鑑をもらって、そして譲渡先を探して譲渡する予定のない猫は、原則としてもとの場所に戻します。手術済みの猫については耳カットをして、ちょっとさっき言い忘れたんですが、今現在のところまだマイクロチップを入れてません。世田谷区は世田谷区獣医師会、あそこは人口80万人のところですので、獣医師会も大きいそうなので、獣医師会の方針で不妊去勢をした地域猫さんはマイクロチップを入れるということで、結構一時もめたんですが、将来的にマイクロチップを飼い猫にまず最初に入れ、それから千代田区の猫もマイクロチップを入れるという日はぜひ来てほしいんですが、外から不妊去勢しているかどうかを見分けないと、これはもうマイクロチップをリーダーを当てられるような猫はトラップで捕まえないんです。

それと、手で捕まるような猫はみんな譲渡してしまから、不妊去勢する猫はマイクロチップが入っているかどうかなんて調べる状況じゃないんです。なので、現段階は費用対効果の中の優先順位で現在は入れていないんですが、だんだん猫の数が減ってきて、でも助成金が打ち切りになると困りますので、できればこのままマイクロチップや、今はワクチンとかいろいろ医療の検討もあるんですけど、そういったことでやっています。そんなことで手術済みの猫を戻すというのが、都心で非常に実は戻しにくくなっているんです。霞ヶ関ビルと新霞ヶ関ビルの間の公開空地に戻すことが果

たしていいか、東京駅まで徒歩 10 分の大手町の近くに不妊去勢した猫を戻すべきかどうか、確かにおそば屋さんのおばあさんがかわいがっているけれどということで、本当に一代限り、そろそろもう尽きたらできるだけ保護譲渡のほうにいきたいなど。

最も、初期の 10 年前に保護譲渡した人が、大手町の近くにビルを三つ持っているオーナーさんの女性がいるんですが、100 頭抱えています。その人は不妊去勢をしてもとに戻すということが、みんなひかれて死んだわということで、ある時期からぴたりとやらなくなって、自分は別にお金があるから助成金なんて結構よと、自分で自己負担でみんな病院に連れていっています。年間 400 万円かけてますとか言っているんですが、400 万円で 100 頭が何で医療費が済んでいるのか不思議だなと私は思いましたし、それから 1 匹につき 100 万円ずつ遺産を残すというのに、弁護士にちゃんと頼んで遺言書に書いてもらわないと日本は法治国家ですから意味ないですよ、あなたが 100 頭残して何かあったらどうするんですかと。あと 100 万円じゃあ足りませんよと、1 頭 100 万円はちょっと安過ぎですから、最低 200 万円は残していただかないと無理じゃないですかと言って、あなたはその程度しか財産がないんですかと思わず言ってしまいました、金持ち自慢の人だったもんですから。【スライド 11】

手術済みの猫を元の場所に戻す Return



- 猫を動物病院に迎えにいき、手術費を立て替えて支払い、「手術完了証明書」に印鑑を押しもらう。
- 猫を元の場所に戻す。「手術済み」の猫については、食べ物を与えたら食べ残しをかたづけ、排泄物を掃除するなど、清掃につとめるよう地域の住民・在勤者などにお願い。
- 保健所に「手術完了証明書」と「支払金口座振替依頼書」を返して請求後、区から助成金が振り込まれる。

上智大学法科大学院キャンパス、成猫 7 頭は去勢・不妊手術後、目には「手術済み」の印鑑をつけて、元の場所に戻した。子猫 4 頭は譲渡 (2011 年 7 月撮影)

【スライド 12】

そんなわけで、印鑑をもらって戻すと。戻すと都心の場合、餓死しかかっている猫はいません。本当によく太ってます。すべて、これちなみに保健所の職員が今戻しているところなんですが、これは上智大学市ヶ谷キャンパスの中に戻して、この上智大学の猫たちについては学生さんたち、職員、それから管理のガードマンの人たち、お掃除の人、みんな御飯をあげていました。キャンパス内にたくさんのフードステーションがあって、でも不妊去勢をしなかったのが、保健所の人と一緒に私もちょっと行ったんですが、管理会社、管理会

社といっても本当に大きな会社ですから、上智大学の管理会社に、できれば管理会社とそれから学生さんたちのボランティアを募ってやっていただきたいと、区民は人数が少ないからやってられないと。そんな話をしたら、法科大学院のほうは特殊な学校なので、何しろ司法浪人なのでそういうムードじゃないと言われてしまって、しょうがないから保健所職員と区民・在勤ボランティアがやりました。

そして、保健所に手術完了証明書と支払い金口座振替書、これは最初のときに出すんですが、2 度目からは別に千代田区のほうで口座はわかっていますので、それで請求します。そして立てかえた金額は後日、千代田保健所という名前で銀行口座に私なんかも振り込まれて、はいはいという感じで。よく私は立てかえボランティアという感じなんですが、実働というよりも保健所の人の方がやった分を立てかえています。【スライド 12】

11 年間でおよそ 2 千頭の手術に助成。苦情は激減、殺処分はゼロに。



- 今期（平成 23 年度）までの 11 年間でおよそ 2 千頭の手術に助成。目に見える成果が上がっている。
- 猫についての苦情は激減。
- 東京都動物愛護相談センターでの殺処分数は、年間 7 2 頭→ゼロ。
- 清掃事務所が取り扱った猫の路上死体数は、年間 3 1 8 体→1 1 4 体と 3 分の 1。
- 飼主のいない猫の数そのものも減っているとみられる。

御茶ノ水の専門学校駐車場で母猫と子猫 4 頭を保護。離乳を待ち、2 か月後に母子すべて譲渡 (2011 年 10 月撮影)

【スライド 13】

そして、2011 年、平成 23 年度までの 11 年間で、およそ 2000 頭の手術に助成されました。その結果、目に見える成果が上がっています。事業が始まる 2000 年、平成 12 年度以前に、区には 1 日二、三件の苦情が寄せられたこともありましたが、1 件の人が 2 時間でも 3 時間でも粘ることで人格誹謗までして、保健所の職員がノイローゼになるまでやるわけです。それだけ人件費も無駄にとられているわけでした。だけれど、現在では猫及び猫に食べ物を与える人に関する迷惑をこうむっているという苦情が寄せられることはほとんどありません。そのかわり、去勢不妊手術が済んでいないと見られる猫がいるんですが、どうしたらいいか。それから子猫を見つけたので里親を探してあげたいんだけど、そういったのはやってもらえるのかなど。それから、病気やけがで交通事故で弱ってます、倒れています、助けてあげてほしいです、そういった動物愛護精神に基づく相談がふえました。

千代田区から東京都動物愛護相談センターに引き取

られた猫の数については、これは事業が始まった2000年以前のデータというのが千代田区だけでは出てないんです。ですから、当時どのぐらいの殺処分があったかというのはわからないんですが、ここ9年の推移を見ても、2001年、平成13年度に72頭の猫が殺処分になっています。それが一昨年の2010年以降、東京都の動物愛護センターに引き取り収容された猫はいません。つまり、殺処分ゼロということです。東京都まで行かなくて結構ですということです。

そのために、先ほど湯木先生が御説明になっていたように、どんな猫が引き取られるかという、路上で交通事故で倒れて、一応息がないと千代田清掃事務所に死体として処置します。でも、息があるものに対しては、今、大体相談が多いんです。かわいそうです、助けてください、それからこのままほうっておいたら死んじゃうと思いますということで、そういった相談で保健所がほとんど動物救急車のように出動してくれているこの2年ぐらいなんです、そしてその動物はよく赤坂動物病院にエマージェンシーで運んでまして、ほとんど本当に八、九割方は例えば脊椎が折れているとか、到着後すぐ死んでしまったとか、交通事故が圧倒的に多いので、この前別な病院でやっぱり到着後5分で亡くなった子は、不思議なことにやせていたと。都心でやせた猫というのはいないんです。それで口をあけたら口腔がんで、食べ物が取れずに衰弱していったんだなと言って、保健所の職員が、僕は何かが命を終えるのを初めて見ました、ショックですということで、本当に生き死にを見る機会がない時代にすごいことだなと。

ですので、赤坂の先生でも本当に病院で見取るしかない動物も連れていかせていただいています。エマージェンシーでできる限りのことをしていただいて、この間とてもいい例といいますか、お話しさせていただきたい1件例が、先生の真ん前で申し上げますと、霞ヶ関なんです、文部科学省の建物はコモングートという古い洋館に入ってます。コモングートの管理会社から通報がありまして、その方はどうも猫好きみたいだったんですが、事務方の方から保健所のほうに通報があって、交通事故で血まみれだと、助けてください、死んじゃうと思うんですけど、茂みの中にて、でも一応こっちを見るんですということで、保健所の車で私もたまにそのとき在宅のデスクワークをしていたんで、一緒に車に乗っていったんです。

そうしましたら、大きな茂みですから、文部科学省、真ん中辺にうずくまってももがぱっくり割れて肉が全部見えて、真っ赤なのは血というよりも既に血は乾い

てて筋肉だったんですが、見えたんです。私も近眼の眼鏡をかけて見たら、筋肉の上をアリがちょっとぼんぼんと歩いてて、これはだめかもしれませんねと。私もだんだん、一緒に十何件も出動して、大体保護できるのは死んじゃうというイメージがあったので、これはだめでしょうみたいなことで、だめですかみたいな、すぐコモングートの文部科学省の管理会社の人たちが、制服の人たちも、それから事務方もみんな集まって来て、それから国会議員が、国会が近いですから、歩いてすぐが国会議事堂なんで、議員バッジをつけた人がどうされたんですか、これこれこうでということで、人だかりができて助かってほしいですねとか、みんな人だかりになっちゃうんです。

それでだめもとだと思って捕獲器を置いて、一晩、朝までに死んでるんじゃないか、とてもじゃないけど、フードを置いてその中に入る状況じゃないなと思ったから、案の定入ってなかったんです。翌朝はタモ網も持って、保健所職員と私と、私は写真班で、写真を撮る余裕もなかったんですけど、そのときは、それから白い制服のガードマン2人とそれから事務方2人と計6名で猫を、虎ノ門交差点側に行ったらアウトだと思ったので文部科学省の建物内に追い込んでいったんです。意外と重症だったにもかかわらず、やっぱり一生懸命必死で逃げて行って駐輪場に入っていったので、文部科学省の職員の自転車をどけながら、最後はタモ網で進行方向にいらした保健所の職員が僕魚釣りやるの趣味なんですということで、さっと、ぶらんと猫が入って、手で捕まえて、そして赤坂動物病院に、先生、夕べ言っていたエマージェンシーの子が捕まりましたということで運んで、だめもとだったんですけど、先生、大腿骨複雑骨折ということで相当な重症だったんですが、到着してすぐ私の目の前で血尿を見たので、少なくとも血尿でも尿は出るんだなど、排せつができるかもしれない、そして助かる見込みがあるのならということで、結局その猫ちゃんは柴内院長先生が、文部科学省だからモカちゃんと名づけまして、セカ1カ月以上の入院で手術していただき、助かり、ほとんどハンディキャップは、休めの姿勢でよく休んでるとか、歩くことややそうかなというぐらいなんです、私も一時期保護していたんですが、その猫は麴町で会社をやっている女性の社長さんが自分の飼い猫にしています。引き取られました。

この医療費はさすがに区の税金を使うのは、やっぱりまだ合意がとれてませんので、これは寄附を集めるんですが、フェイスブックで呼びかけましたら、もと

もと院長先生のところの赤坂動物病院のクライアントさんが直接に名乗りを上げて、直接病院にお金を届けてくださったんです。先生のほうがまたそれも非常に御配慮いただいて、でも大変な金額を届けてくださったので、その後も随分のほかの猫の分に使っていただいていたので、ありがたいことなんです、そのモカちゃんの話があります。

途中でその話になっちゃって済みません。そんなことで、11年間の成果ということなんです、今期の2011年、平成23年度までの11年間で、およそ2,000頭に助成されました。これは助成を受けて、助成というと大体この範囲で先生たちは手術を御協力いただけることが多いので、全額といいますか、一応、かかった人の負担が余りない状態でこのぐらいです。そのほかに、私は助成金なんて要らないわという人も手術に連れていってますので、またちょっとそれもあると思います。

そんなわけで、殺処分ゼロになったという話なんです、もう一つありまして、じゃあ、猫の数というのはなかなか把握するのが難しいんですが、外の猫って一体どのぐらいいるんだろうと。昔、平成12年ぐらいでしょうか、東京都が飼い主のいない猫の猫口調査というのをやって結構マスコミに出た時代もあったんですが、本当に猫の数というのはちょっとなかなか登録制でもなければ、外の猫を数えるというのは不可能なんです、ただ、できることというのは、猫の増減だけはうかがえると思うんです。戸外で猫が増減しているかどうかはうかがえると思うので、その猫が何頭から何頭になったかというのはできないんですが、それは区の清掃事務所が取り扱った猫の路上死体数ということが、一番死体を数えるのが猫の数の増減を見るにはいいかと思えます。

そして、かつて2000年、平成12年度に年間318体の猫の死体、つまり1日1体ぐらいの猫ちゃんが清掃事務所に取り扱われていました。もちろん、このほかに自分の敷地内の動物を回向院というお寺に連れていったとか、それから管理人の人が生ごみで出しちゃったとか、そういったこともあると思うんですが、これはあくまで清掃事務所の数です。それで、現在、平成22年度の清掃事務所が出してきた数が年間114体ということですので、やはりいつの間にか交通事故に遭って、ビルとビルのすき間に逃げ込んでうずくまっているうちに息を引き取ったという大体、それがどうも多いんです。病気よりも圧倒的に交通事故です。いずれにしても、猫の死体数は3分の1に減少しました。飼い主

のいない猫の数そのものも減っているとみられます。

【スライド13】



【スライド14】

それで、ちよだニャンとなる会は一体どうなったのかということなんですけれど、当初は保健所に相談が寄せられたケースなど、飼い主のいない猫についての問題が起きている地域に出向き、TNRを行っていました。しかし、TNRへの理解協力が普及して、地域の住民や在勤者が自主的に取り組むケースがふえています。現在、会として力を入れているのは、普及啓発活動です。フェイスブック、ホームページ、会報などを通じてTNR、保護、譲渡といった飼い主のいない猫についての情報を発信、受信しています。それでも、個人では立ち入るのが難しい場所などでは、保健所と連携協力してTNRや保護、譲渡を実施しています。

最近、力を入れて行ったのは、今ここに写真に出ています、英国大使館は千代田区1番町なんですが、今現在の大使と大使婦人が真ん中にいるんですが、大使の御夫妻からの御相談で、不妊去勢をこの中でやりました。それから法務省に関しては、政治家さんが御協力くださって、法務省内の職員さんが捕獲器も運んでくれて、全部不妊去勢もしました。文部科学省は自主的に御本人たちから猫ちゃんを助けてあげてということでも来ました。それから、TNRと子猫及び傷病の猫の保護譲渡というのはかなり実施しています。

【スライド14】





【スライド 15】

そして、飼い主のいない猫の去勢不妊手術が普及して、区内で子猫が生まれることが極めて少なくなりました。ですので、現在、保健所とちよだニャンとなる会は猫の保護譲渡を進めています。飼い主のいない猫から地域猫。地域猫は全然万歳ではないんです。もうしようがないから、路上に戻してみんなで管理しましょうということ、お掃除もしましょう、御飯もあげたら片づけましょう、みんなで見守っていいね、みんなの和やかな雰囲気、それもありなんですけど、都心で猫を完全室内飼いにしていない人というのは、本当にあの人とあの人ってわかっているぐらい、普通は室内飼いなんです。

というか、室外に出す人は相当、死んでもいいのかという状態の町に住んでいるわけで、丸の内とか大手町とか、すごい場所に皆さん住んで、大体マンションなんです。8割方が集合住宅で、1階で眠っている人というのはまずほとんどいないんです。だから、私たちは余りいわゆる地域猫とは使っているんですが、千代田区の場合、地域猫活動というか、地域猫という取り組みかどうかちょっと微妙です。それは地域猫以上のことをやっているつもりです。ですので、現在、保健所とちよだニャンとなる会でやっているのは、飼い主のいない猫から地域猫、そしてその次の家族の一員、すなわち飼い猫への保護譲渡というのを現在、最も力を入れてます。

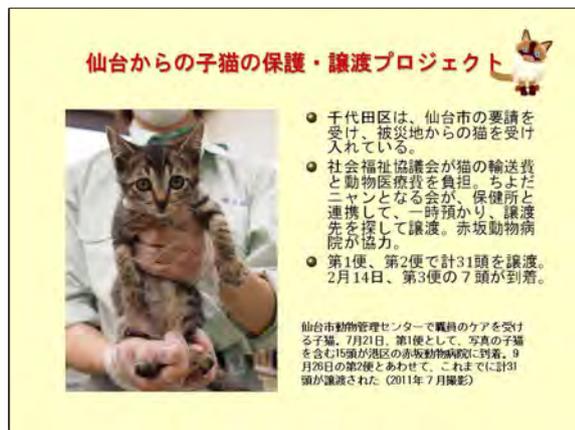
ですので、こういった目もあかない猫ちゃんて産み捨てられた場合、その数が多ければ対応できないところなんですけど、めったにないんです。ちなみに動物の遺棄というのは動物愛護法違反ですので、罰金50万円以下ということで動物の遺棄は犯罪なんですけど、都心で遺棄というのはほとんどないんです。24時間、85万人都市、この中で捨てられたら捨ててみるというぐらいの場所ですので、大体は東京駅から有楽町につながる大きなガードの下の飲食店街で不妊去勢しないで、

飲食業の人たちが食べ物を与えて、どんどん介入して保健所とボランティアが不妊去勢しているんですけど、不妊去勢しないほうがネズミが出なくて、ちょっと減っちゃったから寂しいとかという人たちもいて、そういう人たちの猫が丸の内の新丸ビルの茂みまで歩いていったりするんです、霞ヶ関ビルもしかりで。

そういったことなので、ただ遺棄というのは、この間、赤坂の先生にお世話になった1件が半年前の永田町の山王グランドビルという大きな古いオフィスビルなんですけど、8階の屋上駐車場にシャムのミックス、かなりシャムと思われるんですが、1頭だけ捨てられてたんです。これは意図的な、能動的遺棄です。非常に難しいのは能動的遺棄、これだけ捕まえてたら本当は不妊去勢しないで放し飼いにする人や、それから不妊去勢しないで、御飯までいっちゃうと厳し過ぎるかもしれないんですが、90のおばあちゃんが不妊去勢しないで放し飼いにして御飯をあげたら、これは受動的遺棄といえますか、不作為の遺棄なんです、実は。そういった人を遺棄として考えていきたいというのは、千代田区のように露骨な遺棄が年間1頭ぐらいだったということで、これはどう考えてもわざわざ捨てに来たなという、それぐらいだったんです。そうすると、不作為の遺棄の人は遺棄じゃないのか、この辺が課題かなと思います。

そして今回、殺処分がゼロになって2年目になった、それから余り子猫が産まれない、都心では子猫が欲しい人が結構いるので、どこに行ったらもらえますかとか言うんで、おかげさまで猫が健康で元気で、エイズ白血病は皆さん気にされるので、エイズ白血病が陰性の、本当はエイズは別に一緒に買ってもとは思いますが、とにかく陰性の健康な3カ月程度の子猫でさわれないことがない猫だったら実はウエルカムでして、全然もらい手は割とあるんです。今、震災の影響で、ことしは本当に去年までとはえらい違いで、去年は1頭出すとインターネットで10件ぐらいは来たんです。その中でよりよい人を選んでいった時代なんですけど、今、震災の猫たちが来ているので、相当にちょっと厳しいなと。【スライド 15】

それでそんなこともあったので、仙台市に御縁がありまして、被災地からの支援の一つとして、千代田区長への仙台市長からの要請を受けて、被災地からの猫を受け入れています。社会福祉協議会が猫の輸送費と動物医療費を負担し、ちよだニャンとなる会が保健所と連携して、家庭で一時預かり、譲渡先を探して譲渡してますと。この動物のほうの事業委託を受けてくだ



【スライド 16】

さったのが港区の赤坂動物病院ということで、これはもう柴内先生が仙台市の動物愛護審議会の委員を十何年おやりになって、実は仙台市の獣医師職員のかが先生の共通の知人であって、たまたま上智大学の猫ちゃんの手術のことで院長先生から私に電話があったときに、先生、いただいた話で何ですかということで、手術しますよということで、そんな話をして、実は仙台からこういう要請が来ているんですけどと言って二つ返事で引き受けてくださって、このプロジェクトが立ち上がりました。

仙台からの子猫の保護譲渡プロジェクト、今回到着したのは子猫じゃなかったんですけど。それで第一便が7月21日に15頭、第二便は9月26日に16頭、計31頭はこれまでに仙台市からやってきて、赤坂動物病院に到着して、その場で健康診断を受け、幸い、一応入院が必要だった動物はいなくて、でも例えば猫ウイルス性鼻気管炎がストレスで運ばれている間にくちゅくちゅとなってきたとか、心筋症が見られるわとか、それから腸内寄生虫のほうの後で出たとか、一応、仙台市で駆虫してもやっぱり出たりもすると。シラミが後で出てた子もいて、やっぱり先生たちのところもかなり感染症管理が大変だったと思うんですが、すべて赤坂の先生たちがいらっちゃって千代田区の事業もあるということで、そして第三便が実はつい最近、2月14日に赤坂動物病院に到着しました。

2月14日に到着した猫ちゃんは数が少なくても6頭で、全部成猫でした。そして、仙台のほうでは黒猫は余り人気がないそうなので、東京は黒猫がすごく人気があるんです。何でしょうね、あれ。魔女の宅急便のジジのイメージかわからないんですが、黒か白ってすぐもらい手がつく。あと茶トラ、何といったって、黒白が今でも余っているということで、黒白が多いというお話があります。ちなみに保護譲渡について、やはり例えば保健所は保護譲渡といっても、保健所の人が

人を差別することはできませんので、東京都のやり方もそうなんですが、東京都のセンターからかなり成犬、成猫もみんなどんどん出していますが、すべて委託業務にしています。二十七、八団体が団体譲渡の委託業務を受けているわけです。

というのは、四、五年前の徳島のがけっ縁犬のことを思い出していただくとなんですが、マスコミに載ってワイドショーまで出たから100人の応募があったと。それで結局くじ引きで決めたら、絶対に譲渡すべきでない人が絶対に譲渡してはいけないはずの犬をもらってしまって、結局2度も逃げ出して、今はボランティアが保護しているということで、そんなことになってしまうんです。行政の人は人を差別できないと。だから、東京都でも講習会さえ受ければ譲渡しちゃうんです。ですので、団体譲渡という形で少しずつ、二十七、八団体が成猫も成犬もみんなどんどん出してまして、そうするといろいろ言えるわけです。年寄りにあげないだの、それからあなたみたいな狭い家じゃだめだとか、それよりもあなたみたいな責任持てないような人はだめとか、家族歴で、前に亡くした犬や猫が原因不明で8歳、7歳で死んでいるといったらあげないですよ。

でも、行政の人はそれを選べないです。動物病院には連れていかれなかったんですけど、健康診断はどうされましたか、ワクチンは何を打ってましたかと、その質問に答えられないレベル、私たちは犬をやっていないので猫だけですが、三種混合ワクチンを知らないとか、健康診断もしてなかった、最期のときも動物病院に連れて行ってない、そういう人には譲渡できないと。これはボランティアがやる仕事だったら言えるんです。それが行政の人はできないと。それから、今は早期不妊去勢手術が普及してますので、大体譲渡する動物もみんな不妊去勢して譲渡してます。それも一応助成事業ということで飼い主のいない猫にかわりがありませんので、外に放す猫だけの助成事業じゃありませんので、一応、特にそういった猫ちゃんの不妊去勢では赤坂の先生にお願い、要するにいないと困るという感じになってしまって、本当に先生たちの協力なくしてはこういった事業というのはできませんので、いかにその地域でやっていただけるかということなんです。【スライド 16】

いよいよ最後なんです、これは神田の元魚屋さんのお父さんとお母さんの写真なんです、これは上智大学の四ツ谷キャンパスで見つけた、えさやりに自転車で神田から四ツ谷まで通っていたと。距離でいうと相当で、えさやりのために四ツ谷まで通っていたのかと驚くんですけど、それでそのうち情が移っちゃった



【スライド17】

この猫ちゃんをもらってきて、妻のほうがどんな子猫を拾ってきたのかと期待してあげたら大きかった。でも、かわいいねということで大事にしてるんです。

そして、これ思わぬ効用なんです、動物の役割ということにかかわると思うんですが、飼い主のいない猫の問題、本当は問題だったんですが、この課題に地域ぐるみで取り組むことで、地域のコミュニケーションがよりよくなったという言葉をあちこちで聞きます。都市では人間関係がどうしても希薄になってくるんですけど、動物が介在すると簡単に会話ができる、年齢も職業もさまざまな人たちが言葉を交わし合える。その猫ちゃん知ってるわよ、おすし屋さんが面倒見るのよとか、みんな簡単に話ができ、そして、そこのおすし屋さんがうちだけじゃなくて、あそこのだんなもいつもえさやってるよとか、町会長さんが熱心なんだよねと言って、みんなつながっていくんですよね。

ですので、動物を介在にするとみんな表情がやわらかくなる、にこっとする、それから会話が通じる、そしてどんどん次から次と人間関係がつながっていく、これはまさに動物が持つ社会的効用の一つだなど。飼い主のいない猫といえど、多くの人がやっぱり飼い猫と同じ姿をしていますし、9割方の方は日本猫を飼ってますから、わざわざブリーダーやペットショップから買うって8%という数字がありますから、大体の方は日本猫なんです。犬に比べるとはるかに猫は差別意識がなくて、うちの子とおなじだと思えます。だから、外の猫といえども本当にこれはアニマル・アシステッド・アクティビティという感じなので、これも一つかなと思います。

それから、こういったことで高齢化が進んでいる都心なんです、高齢者の孤立化を防ぐことにもなりますし、今までおばあちゃんが1人でこっそりえさやりしてたのが、みんなによかったね、不妊去勢をあの人たちがしてくれてよかったね、かわいいねと言ってく

れたことで、おばあちゃんが孤独じゃなくなった。それから子供たちに説明することで、命の大切さを考えるきっかけになってもらってる。それで、問題で猫の苦情で大問題だったことが解決に向かっていくと、この事業が思わぬ恩恵をもたらしてくれることがわかるわけです。

ですので、ぜひ全国の自治体の皆さんには、千代田区はそれはいいよ金があるからねとか、特殊な場所でしょうとか、ボランティアがいるんだよというけれど、ボランティアは4万5,000人しかいないんです。在勤者がボランティアだったりもするので、そのせいもあるんですが、要は行政が主導でやる、自治体を挙げてやる、予算もつける、そして進めていく。そうしないとだめで、東京都下の立川市で前に、例えば500万円を動物愛団体に丸投げしたらそこに苦情が全部集まっちゃって、行政に準ずる苦情場になっちゃって、良心的にやり始めた人たちがみんなパンクしてつぶれちゃったとか、そうなっちゃうので丸投げはだめです。

その辺がやっぱり獣医師会に丸投げ、隣の文京区の例なんです、そうすると獣医師さんたちの都合になってくるんです。月曜日は何とか先生、火曜日は何とか先生、そうすると文京区でもここからここまで遠いわけです。皆さんボランティアの人はただでさえ大変な思いをしてタクシーを使って行ったりするわけで、これ以上の負担は千代田区みたいに保健所の車がみんな出て、なるべくボランティアの人がタクシーを使わないように、残業もしてくれるんです。夜暗くなっても一緒に保健所の方がやってくると、そこまでやってくれる保健所の方が千代田区みたいにいればいいんですけど、大概の場所ではタクシー代が相当かかっているということなんです。

ですので、ボランティアの人がどこまで負担するか、それとボランティアの人は好きで地域猫をやっている人ではない。猫の問題は自治体ぐるみでやるべき大事な課題であると。動物福祉の問題であり、環境問題なんだと。これを地域猫の活動家の人たちに押しつけて、まるであたかもその人たちが趣味とこだわりでやってるみたいな扱いをしてたら、いつまでたっても地域社会でその人たちをいじめ続けるし、その人たちもどんどんひねくれて難しい人格になっていくので、絶対に行政が主導でやらないとだめだというお手本が、12年間の千代田区の成果です。

予算はほかの地域で聞いたんですが、確かに2万5,000円までとか1万7,000円はいいほうというか、中央区と千代田区が最も金額が高いので、本当に全額

助成みたいな形で先生におつき合いいただけるんですけど、でもその結果、例えば保護譲渡すれば、その病院の先生のところがクライアントがふえるかもしれないし、それからそのまま健康管理のレベルを上げていってほしいと。我々は保護譲渡を進めるときがよい飼い主づくりのチャンスと心得てますので、上げるときの誓約書には半年に一度の健康診断、それから三種混合ワクチンは初年度にできれば3回、そして次の年に1回したらあとは3年に1回してくださいね。でも、健康診断は半年に1回連れていってくださいね。それから不妊去勢はしてありますし、マイクロチップは次の課題なんですけど、まだ入れてないんですけど、そこまでしてるからあなたもきちんと飼育してください。絶対条件が完全室内飼育です。放し飼いにする人にはあげません。例え郊外でもあげません。完全室内飼育で終生大事にされる方。その大事というレベルは気をつけないとお話をすると、総合栄養食という言葉も、知らなかったわ、前から飼育している猫がいても、そんなの見てなかったというレベルの人もいますので、かなり飼育については、できればちゃんと健康管理して、世界的なブランドのものを差し上げるといいよと、病院の売ってるものもいいですよとか。それでわざわざ私たちは保護する猫にはそういうものを食べさせて、それをおまけにつけてます。毛づやが全然違いますよと言って。そしたら譲渡した先がフランスから取り寄せたオーガニックのを食べさせて、それはそれで結構です。そこまで言いません、どうぞということで。

やっぱりレベルの低い人に渡したらレベルの低い飼い方をされます。そして、不妊去勢しないで渡せば、そこで下手するとそこで猫がふえますので、本当に保護譲渡はいい飼い主の譲渡のときがきっかけかと思うので、ぜひ、犬のことはここまでしつけ教室に行くのが常識になってきたと、都心では大体みんな行ってると思うんです。千代田区内でつながれて飼っている犬というのはいませんから、ベランダに出した日にはもうすぐ苦情になりますから、外につなぐ場所もないし、つながれている犬を見る機会もないんです。ですから、犬の問題は相当殺処分数というのは年間ゼロから3だったんですけど、今はもうゼロになってますけど、犬のボランティアの人が一生懸命やったり、警察の職員が引き取ったりするので。要は、千代田区が殺処分ゼロになったというのはちゃんとした飼育をしていくというのを進めていけばいいわけで、ですので、犬に関して、ただ今回、東北を回っていったときに放し飼いの犬にちょっとびっくりしたんで、これは東京だけ

でもちゃんとしていかないと、放し飼いの犬がいるんだと思ってちょっとショックを受けました。

そんなわけで、すっかり長くなってしまいましたが、千代田区の事例を発表させていただきました。よろしくお願いします。ありがとうございました。

○藤田座長

ありがとうございました。

先生方のお話、大変熱のこもったお話でしたので、皆様にも何かの芽が心の中に、あるいは頭の中に芽生えていけばいいなというふうに思って終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。先生方もどうもありがとうございました。

○総司合会

皆様長時間ありがとうございました。お時間が少なくて、大変申しわけございませんでした。座長の藤田先生、本当によくまとめて頂きました。先生、有難うございました。

今ペットフード業界様のほうで、大変よいフードを各社作っておられます。サポートして下さいましたネスレピュリナペットケア様も猫のフードに関しては大変歴史を持っておられます。そのあたりのところは前回栄養学でもやりましたけれども、飼い主さんがやはり猫ちゃんにとっていいフードというのはどういうものがあるかというのをよくよく勉強されてやっていかなければならない部分だと思います。皆さん、よく御存じだと思いますけれども、改めて新しい商品等も開発されます。例えば、前回2009年には子犬のフードの事例でしたけれど、腸にいいフードが免疫力を高めるという内容でネスレピュリナの研究所のゾルライク先生が御講義を下さいました。そういうお勉強も皆さん是非やっていって頂きたいと思います。本当に皆さん、有難うございました。



母犬のように子犬を守る。

DHA



天然DHAを配合し、
成長期の子犬の脳と
目の成長をサポート

消化吸収



初乳成分(コロストラム)
が健康な腸内細菌バラン
スを保ち、子犬のお腹の
健康維持をやさしくケア

免疫力維持



初乳成分(コロストラム)
配合し、優れた栄
養バランスで母犬から
離れた子犬の免疫力
の維持をサポート

体格



筋肉、身体作りの元と
なるたん白質を強化し、
カルシウム・グルコ
サミンを補給



「ピュリナ プロプラン」小型犬子犬用/子犬用
初乳成分配合で子犬の健やかな成長と
健康維持をサポート。

子犬は生後6週齢~5ヶ月齢の間に免疫機能が低下することがピュリナの最新の研究でわかりました。プロプランはこの臨床データに着目し、母犬の初乳成分であるコロストラムを配合。母犬が子犬をケアするように、プロプランが子犬の免疫力を維持し、健康的な生涯のスタートをサポートします。



PURINA® プロプラン
PRO PLAN®

® 登録商標 ネスレ日本株式会社 ネスレピュリナ ペットケア <http://www.proplan.jp>

PURINA.
Your Pet, Our Passion.®